2023 年 12 月 5 日放送

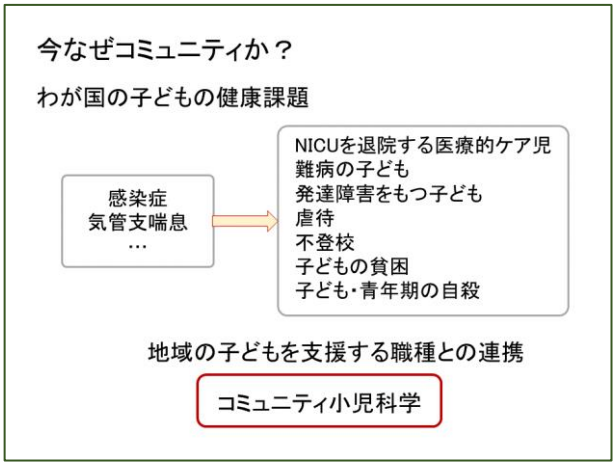
コミュニティ小児科学とは

淀川キリスト教病院　小児科
副部長　小西　恵理

皆さんは最近、「コミュニティ小児科学」、または「Community Pediatrics」という言葉を耳にされたことはないでしょうか．今日は、その「コミュニティ小児科学」について、その定義と実際、これからの展望についてお話しします。

子どもの健康課題

我が国の子どもの健康課題は、近年、大きく変化してきました。従来、外来や入院患者の多くを占めていた感染症や気管支喘息は減少し、NICU を退院する医療的ケア児、難病、発達障害、虐待、不登校、子どもの貧困、子ども・青年期の自殺などが大きな問題となってきました。これらは小児科医だけで解決するのは難しく、地域の子どもを支援するさまざまな職種との連携・協働が必要となります。



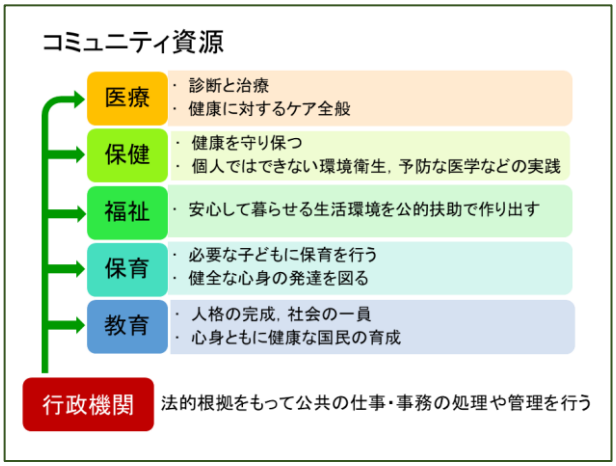
また、小児科医には疾患を持つ子どもたちの診療だけでなく、すべての子どもの健康や成長を支援する役割もあります。人の健康を考えるとき、biopsychosocial な視点を持つことの重要性は広く知られており、生物学的な要因と並んで、ストレス耐性、自己肯定感、社会適応スキルなどの心理的要因や、家族や環境、経済状況などの社会的要因を考慮する必要があります。

コミュニティ小児科学とは、小児科医の活動において、地域へと視野を広げ、子どもたちの心身の健康のために地域の資源と連携・協働する立場を指し、関連する研究や、次世代の医師の育成も含まれます。

ここで改めて、今回使用するコミュニティという言葉の意味について、説明しておきます。人は生きている限りどこかに居住し、生活しています。コミュニティとは、居住地域を同じくし、利害を共にする共同社会で、町村、都市、地方など、生産・自治・文化・風習などで深い結びつきを持つ共同体を指します。そして、その地域の住民とその活動や、地域の生活を支えるシステムも含みます。

コミュニティ資源

次に、コミュニティ資源について説明します。コミュニティ資源とは、コミュニティの中で利用できる、情報やサービス、専門知識を提供する機関や団体のことで、その活動はすべて根拠となる法律に基づいています。ここでは、子どもを支えるコミュニティ資源を、医療、保健、福祉、保育、教育の 5 つとします。医療は、ご存知の通り「診断と治療」および「健康に対するケア全般」を行います。保健とは「健康を守り、保つこと」ですが、それには環境衛生、予防医学など個人では実行できないことが多く含まれます。これを代行するのがコミュニティにおける保健ということになります。福祉は、充足し安心して暮らせる生活環境を公的扶助によって作り出す役割を持っています。保育は、必要とする子どもの保育を行い、その健全な心身の発達を図ることを目的としています。教育は、人格の完成を目指し、社会の一員として心身ともに健康な国民の育成を行います。



これらは医療機関や保健所、公私の施設や学校などで執行されますが、執行に際する公共的な仕事や、事務処理、管理を行うのが国、県、市町村などの行政機関です。よって、行政機関はすべてのコミュニティ資源に密接にかかわっています。

（子どもを支えるコミュニティ資源と、その管理を行う行政機関の関係性が見えてきたでしょうか。）

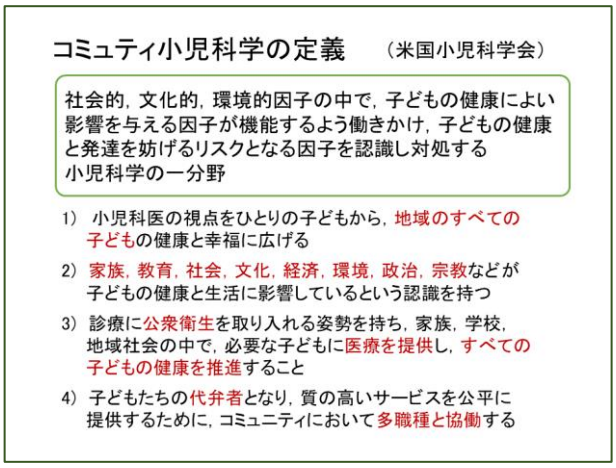
コミュニティ小児科学の定義

では、子ども自身、そしてコミュニティと小児科医がどのようにかかわっていくのか、コミュニティ小児科学の定義をご説明します。

米国小児科学会の定義では、コミュニティ小児科学とは、社会的、文化的、環境的因子の中で、

子どもの健康に良い影響を与える因子が機能するように働きかけ、子どもの健康と発達を妨げるリスクとなる因子を認識し、対処する、小児科学の一分野とされています。具体的な指針として、

・小児科医の視点をひとりの子どもから、地域のすべての子どもの健康と幸福に広げること、
・家族、教育、社会、文化、経済、環境、政治、宗教などが子どもの健康と生活に影響しているという認識を持つこと
・診療に公衆衛生を取り入れる姿勢を持ち、家族、学校、地域社会の中で、必要な子どもには医療を提供し、すべての子どもの健康を推進すること
・子どもたちの代弁者となり、質の高いサービスを公平に提供するために、コミュニティにおいて多職種と協働すること



が挙げられています。

ここでは、小児科医が疾患を持つ子どもの診療はもちろん、病院を訪れる機会がほとんどない大多数の子どもたちにも目を向け、その生物学的、心理学的、社会的側面を考慮し、健康と成長を多職種と共同して支援する重要性が述べられています。

多職種連携

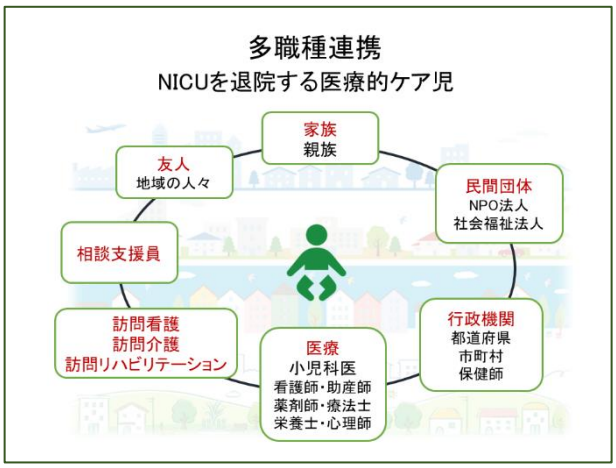
それでは、私たち小児科医は、実際にはどのように活動すればよいのでしょうか。私たちが子どもたちのために地域と連携、協働する場合、対象が一人の特別なケアが必要な子どもであるときと、地域の子ども全体を指すときがあります。

まず、個々の症例について考えてみましょう。私たちは、最初にお話ししたように、医療的なケアが必要な症例や発達障害、慢性疾患、不登校、被虐待児など多くの症例において、子どもたちが安心して安全に生活できる場を作るため、地域と連携、協働する必要があります。それには、そのような症例がアクセスしやすく、保護者との信頼関係が築きやすい、または既に築かれている小児科医が専門知識を持って地域の職種に繋いでいき、ともに子どもを支援することが有効です。

たとえば、NICU を退院するときに医療的ケアを必要とする乳児では、退院までに地域と連携して、自宅で安心して暮らせる体制を整える必要があります。それには、必要に応じて在宅医療を行う地域のかかりつけ医や、相談支援専門員、保健師、訪問看護、訪問介護などと連携をとることが必要です。また、医療費助成制度や、育児支援体制の確認も退院前にしておきます。このような支援は退院後も継続して行われることが重要ですので、多職種カンファレンスなどの退院

調整活動に加えて、退院後も関係者と協働し生活を支援していきます。

患者の状態は時間的、空間的に変化するものであり、支援者にはそれぞれの役割を互いに認識し、活かしあえる連携の充実が望まれます。

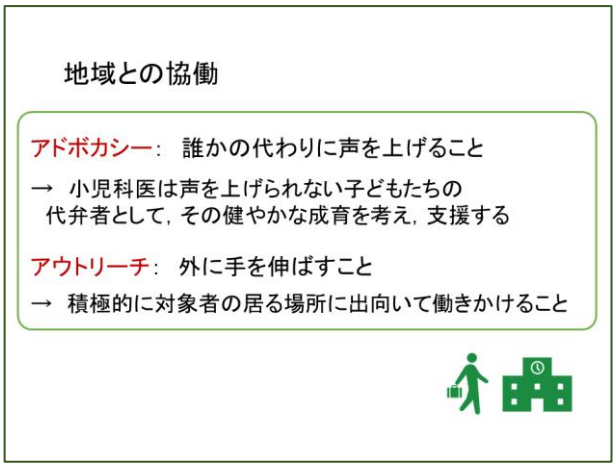


続いて、地域の子ども全体の健康の推進のために行われる多職種連携に移ります。健康の推進というと最初に思い浮かぶのは乳幼児健診、学校健診、予防接種などだと思いますが、小児科医としては院内外での乳幼児健診や予防接種、校医や園医を担当します。また、地域の施策決定に参加したり、専門家として講演や意見を求められることもあるでしょう。連携先は学校、保育所や行政機関、NPO、マスメディアなど多岐にわたります。

コミュニティで活動するとき、キーワードとなるのは、アドボカシーとアウトリーチのふたつです。

アドボカシーとは、コミュニティ小児科学の定義にもありましたが、代弁者のことで、誰かの代わりに声を上げることです。小児科医は、声を上げられない子どもたちの代弁者として、その健やかな成育を考え、支援する立場にあります。私たちは、コミュニティで活動するとき、常に、小児医療の専門家であり、子どもの代弁者であることを意識する必要があります。

アウトリーチはもともと「外に手を伸ばすこと」という意味で、積極的に対象者がいる場所に出向いて働きかけることを表します。アウトリーチ型協働支援では、子どもたちが生活する場所に出かけていくことで、子どもたちが過ごす環境を知ることができ、こどもたちに日常的にかかわる人たちと協働することができます。多職種と顔の見える関係をつくり、子どもを支援する他の職種が、どのような役割を持ち、どのような視点で子どもたちにかかわっているかを知ることも重要です。



今後の展望

ここまで、コミュニティ小児科学の定義と、コミュニティ資源とのかかわり方について説明してきました。最後に、これからの展望についてお話しします。

ここまでの話をお聞きいただいて、このような活動は自分もすでに行っている、と思われた方

や、地域との協働がうまく機能した事例を聞いたことがある、と感じた方もいらっしゃると思います。まずは、それらの活動を個別の事案で終わらせず、小児科全体や、コミュニティ共通のシステムに一般化、標準化していくことを考えたいと思います。コミュニティ小児科学の活動は、小児科医の業務の一環として意識されずに行われがちです。そういった事案を特定の地域や一時的なものに終わらせないためには、事案を集積できる横のつながりの場を作ることが必要ですし、学会や講演会、論文での発表が重要で、コミュニティ小児科学が小児科学の一分野として認識され、活発な論議がなされて、最終的にはコミュニティに良い影響を与えることが望まれます。

コミュニティにおける小児科医の活動としては、今後、子どもの代弁者としての発信も重要です。これまで述べてきた、子どもたちに関与する様々な課題、またそれに対応することが期待される成育基本法やこども家庭庁の成立もあり、子どもを巡る社会的な状況はこれからさらに変化していくことと思われます。その中で、小児科医は子どもの心身の健康の専門家として、国家、地域、個人、それぞれのレベルで発信していくことが求められます。

最後に、次世代の小児科医への継承です。若手小児科医には、症候や疾患の診療について学ぶのに加えて、子どもを biopsychosocial な視点で見ること、コミュニティにおける子どもの生活にかかわる人たちや制度、コミュニティにおける医師の役割を学ぶことを伝えたいと考えます。それには、日々の診療の中で、患者と接するときに子どもの社会的背景を意識しながら診察すること、医療機関内外での多職種カンファレンスや会議への参加、アウトリーチの体験などが有効と考えます。そしてまた、先輩医師が、子どもたちの健康と成長のためにコミュニティ資源と協働し、地域で活動する姿を見せるロールモデルとなることが重要ではないでしょうか。

わが国では、コミュニティ小児科学は、小児科の一分野として動き始めたばかりです。日々の診療にコミュニティ小児科学の意識を持ち、活動することから始めていきましょう。

「小児科診療 UP-to-DATE」

https://www.radionikkei.jp/uptodate/